2026 年 1 月 25 日（顕現後第３主日、Ａ年）
メッセージ
「力ある言葉」
（マタイによる福音書４:12-23）

司祭ヨセフ太田信三

ガリラヤ湖畔を歩いていたイエスが、シモンとアンデレという兄弟、続いてもう一組の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとヨハネにも声を掛けました。それは「人間をとる漁師にしよう」という、驚くべき声掛けでした。意味もわからない、信じがたい言葉ですが、彼らは自分の生活を成していた漁業道具、そして家族を残し、すぐに従いました。常識的に考えれば選択し得ない決断です。

マタイ福音書はこの出来事を非常に淡々と記しています。なぜなら、この箇所で著者は、「イエスの弟子になるにはこのような資質がなければならない」ということを強調したいのではなく、「イエスの言葉には一瞬にして人間の運命を変えてしまう力がある」ということ、そして「その力ある言葉を語る方がここにおられる」ということを伝えたいからです。

イエスは、「悔い改めよ、天の国は近づいた」と言いましたが、イエスの出現こそ天の国の到来に他なりません。二組の兄弟たちを見て、語りかけたイエスの後ろには、この「天の国」があるのです。二組の男たちの決断を即座に引き起こしたその力とは、この天の国からの力、この世を創造した神の言葉の力に他ならなかったのです。

神の国というと、なかなかイメージがつかないかもしれません。それはイエスの弟子たちも同様で、弟子たちも、神の国が分かったからイエスについて行ったわけではありません。むしろ、力ある言葉に突き動かされ、これからイエスに従う中で、そして死と復活に立ち会うことで、神の国を見ることになったのです。

そうであるならばこの主日、わたしたちはあらためて、力あるイエスの言葉を聴きたいと思います。悔い改めよ、と言われるイエスは、今日の福音で二組の兄弟を見つけ、声をかけたように、私たち一人ひとりを見つけ、声をかけてくださっています。私たちは自らの力だけで悔い改めることはできません。しかし、私たちに力が無くとも、イエスの声、み言葉にはその力があります。私たちがそのイエスのみ言葉に留まり、み言葉と共に歩むなら、その力あるみ言葉によって、私たちは変えられます。そうして、み言葉を通してイエスと共にある歩みの中で、私たちも弟子たちと同じように、天の国を生きるものとされます。